

SQ5：資料17によると、張学良は何を批判していると読み取れるか？なぜこのような演説をしたと考えられるだろうか？

理解

資料17（資料編p.103）：生徒にこの資料を読み解かせ、SQに答えさせます。

【資料17：張学良の演説】

以下は、1932年4月12日の中南海の懷仁堂で当時、北平綏靖公署主任*であった張学良が國際連盟のリットンや日本側参与員の吉田伊三郎ら82名を招宴した際に行った演説を中心とする文章である。

「第一に、東三省は歴史的・政治的・経済的に、從来から中国全体の一部であり、東北人民は歴史的に長期にわたる一つの混合民族を代表し、中華民国の自由なる人民にはかならない。経済的にも東北は中国経済全体の不可分の一部であり、政治的にも数百年來の中国の發展における重要な部分であった。今日、中国四億五〇〇〇万人は、東北を中国の一部とみなしており、山東・江蘇・廣東といさかの異なりもない。およそ東三省は中国の一部に非ずという謬説や、力で非法な傀儡政府を設立し、中国の他地域から分離させようとするものは、領土の野心を抱いているばかりか、一九二二年のワシントン會議の九ヵ国条約にいう中国の主権と独立、領土と行政の完全性を尊重する原則に違反するものである」

ここには、中華民国という国民国家の主権が東北をも含めたものとして存在しつづけてきたことが主張され、日本側のいう、東北は中国にあらずとする論点への批判であった。第二の論点は、二十世紀中國そのものの歴史的位置への考察を含むものであった。

「第二に、現代中国はまさに重大な改革期にあって、……意識的、無意識的にも中国全国民を現代世界の制度に照應させつつある。…（中略）…しかも、中国の全土は、全歐と日本の総和より大きく、中国の人口は、最近の調査では全歐と同じである。國民革命運動は、同時に政治、工業、社会、文学の領域の革命であり、私は、中国の友人や列強政府が、この変化の偉大さを軽視しないよう希望する。同時に私は、それを生み出した精神は現代の新勢力として、世界の統一と平和を強化するであろうと確信している。日本の政界人士が、公然と中国は國家統一を欠く国であると言ったり、中国は現代国家に非ずと誹謗するのは、いずれも故意に政治的に事実を蔽いかくし、世界の中国認識を惑わせるものである」

*北平綏靖公署とは、国民党が現在の北京あたりに置いた軍事的・政治的拠点である。張学良は当時、北平綏靖公署の主任であった。

（西村成雄（1996）『張学良一日中の霸權と「満州』』岩波書店 pp.97-98）

資料読解の手がかり

- ・ 張学良は、下から2行目の文章で、日本の中国認識は政治的に事実を蔽い隠し、世界の中国認識を惑わせるものだと述べています。
- ・ 東三省（満州）は從来から中国の一部であると主張しており、資料15、資料16とは相対する主張していることがわかります。
- ・ 本演説には、リットンや吉田伊三郎らが立ち会っており中国の国内向けに行われた演説ではなく、関係諸国に向けて行われたと考えられます。

詳細は次頁

SA5：生徒が以下のように解答できることが期待されます

- ・ 張学良が、日本の中国認識が事実とは全く異なるものであると批判している。また、この演説は國際連盟のリットンや日本人らの目前で行われていることから、日本の満州侵攻を阻止したいという狙いがあったと考えられる。